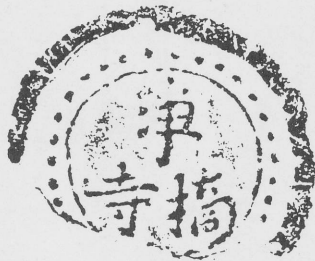


西宮市立郷土資料館ニュース



1990. 1. 1

資料館ノート

郷土史講座と体験学習

西宮市立郷土資料館が開館して、今年度で5年になる。開館以来、毎年行ってきた事業のひとつに「親と子の郷土史講座」がある。夏休みの数日間、郷土の歴史を学びながら親子の対話も深めてもらおうという主旨で、小学5・6年生とその保護者を対象に開催している。また、中学生を対象にした「中学生のための郷土史講座」も同じ時期に開講している。今年は、8月22日から26日までの5日間であった。

応募者は毎年30組前後で、その中で、2年連続して受講してくれる親子もかなりいることは、講師にとって、また、企画者にとってたいへんうれしいことである。この30組60人という人数はバスをチャーターしての臨地学習会を講座に組み入れているので、ほどよい人数である。

講師は、西宮市内の小学校教諭で作る社会科学研究グループから推薦をいただき、1講座(90分)を2名で担当してもらっている。5年間連続して引き受けていただいている先生も多く、どの先生がたも並々ならぬ熱の入れ方である。10枚以上にもおよぶ資料プリントが出るのもたびたびで、現地に足を運んだ自作のスライドやビデオが毎年登場してくる。

例年のごとく、今年度も本館の「特別展」

とタイアップした講座内容を計画したが、この中に「体験学習」を入れたのは初めての試みであった。「特別展」のテーマが「たがやす、まつる。—西宮の農具と年中行事—」であったので、講座最終日に、いのこ(亥の子)の行事に70年前まで使ったという「わら鉄砲(わらづと)」作りをとりいれた。

講師は西宮市内のおとしより3人である。77才、87才、93才(恐るべし、老人パワー!)。わら鉄砲の材料であるもち米わらは講師に持ってきていただき、企画側は細いわらなわを用意したが、近年、わらなわさえ販売する店が少なく、少し太めのなわでがまんしていただいた。わらをさばき、これを芯にして、それにグルグルとなわを巻いて、最後に把手を作ればできあがりである。おじいさんから、「いのこ、いのこ、いのこのばんに、じゅうばこひろてあけてみれば、ほこほこまんじゅ、にぎってみれば、じゅうべえさんの………」という歌を教えてもらい、親子で作ったできたてのわら鉄砲で地面をバンバンたたいて終講となった。

参加者からは、「このような体験学習をどんどんやってほしい」という要望しきりであった。

「若き頃の友梅輝語りけるハ、我家に鶏を飼置しに裏垣の外ハ野なりけれハ、蛇来りて、鳥屋に入て、鶏卵に取食ふ事しはくなりけれハ、下僕の仕業ならんと思ひ、せめ問ければ、今日蛇の鳥より出るを見し、ここへける故、翌日伺ひて見るに、はたして蛇鳥屋に入、鶏卵を呑、庭に飛落れば、鶏卵は腹の中にてつぶれけれハ、元の叢に入ぬ。悪き事と思ひ、又の日、鶏卵一つ打破りて、其からに土をねり入、元のこくくにして鳥やに入置、伺ひ居ける所、又蛇来りて、鳥屋に入、右の土をつめ置しを呑て庭に飛落れれとも、土ゆへつぶれされは、大きにもたへ苦しみけり。猶いかにするや、と見て居れば、庭に打はへ置し繩のなひ目の間へむりに尾をさし入、逆に尾より抜、からふして土を咄(吐)出してくさむらへ逃帰りぬ。跡にて、彼拔出し繩目を見れば、蛇の鱗まふれに成て有しか、甚なまくさかりし。其後再度来らずと語り。」

異国文化を伝聞したものに、琉球国^(三七)、ジャワの風俗がある。筑前国志摩郡の伊勢丸という舟が宝暦一二年に難破し漂流したが、乗組員は孫七という者を残し全員が死亡し、一人生還した孫七がジャワに滞在した間に見聞したジャワの風俗を紹介している。

雑文として、伏見の地名の由来、紀伊国主へ犬が献上された話、豊臣秀吉に様々な奇術を見せて処刑された切支丹の話、男より女が多い理由、雷のときのまじない、犬の吠えないまじない、崇り^(三四)・縁起^(三五)・加茂季鷹^(三六)、西依成斎の弟子・奥野澄斎又市、儒学者・熊沢治郎、打かい(旅人が銭を入れて腰につける袋)などがある。桜戸翁が犬の吠えないまじないを教えてもらったにもかかわらず、反対に犬に噛みつかれて、教えてくれた友人に文句を言うところなどはユーモラスである。

最後に「凡、人の命上寿は百歳、中寿は八十歳、下寿は六十歳と語り。又、五十を不受とす。しかれば、五十にて死するは弱死あらず。下寿をたもつ人も多からず。今、我古稀のよはひ過るまで、寿をたまちける事をよるこひ樂しまさめやは、我五十過なんとせし。年の暮の歌に、

のと瀬川長閑に暮る年なから五十そ越しぬると思ふ憂たさ

と口ずさみぬ。其時、はや老を歎く心発りぬれば、かく心弱くてはあらし物をと思ひ、夫よりして常の気象は従容不迫といふ四字を守り、心をおもむるになし、いよく壮ならん事をほりせしか。今はハヤ、老に老ぬれば、唯、養い楽しむ事をのみはかり、此二とせ三とせか程は桜戸に隠れ住、律の門を閉てひそまり、月日を送りぬ。閑なる俤、庭の木々野つらなと詠居る折から、常にねもころに訪来る同齡の老人、今日も門の戸叩き音信ければ、しハし物語し果て言やう。此すみかいと淋し。我等は商人なれば、明暮、人の出入多きに馴ぬれば唯繁花の賑々敷を好ミけれハ、其心反すと云。予こたへて言。我も生得の隠者にあらざる事は足下はしめ人々知る処なり。繁花をきらふにあらず。かく閑居しけるは、賢者のさとしに順ひ老を養ふに益有をしりて隠者のまねをなす。其樂しみ外にもとめず、明暮、唐大和の書を開き、見ぬ世の人を友とし、又、覚へぬ事をまさくり、出て見る時は玉拾ひ得し心地す。其外、四時うつりかはる折々の景気と草木のうるはしきを見るなど、日毎のたのしみ尽る事なし。」

と、老いの心境や隠棲の日常の様子を記している。

このように、阪倉信明は文化・歴史などに深い知識を持っており、自他ともに認める文化人だったのであろう。本編は中巻を欠いており、紹介した原文は文化的なものばかりになってしまったが、後日、本編草稿とも全文解説し紹介したい。なお、解説するにあたって、西宮市行政課の原和子氏よりご教示いただいた。深く感謝申し上げます。

(当館嘱託)

(注一) カッコ内の番号は上下巻を通じての本文の章。上巻二五章、下巻二六―四二章。

(注二) 原文には句読点はない。また、変体がなはひらがなに改めた。

資料紹介 『桜戸雑話』

池田直子

昭和六三年一〇月に『桜戸雑話草稿』上中下三巻、『桜戸雑話』（仮に本編と称す）上下二巻、併せて五巻を阪倉一郎氏のご厚意により当館に寄託を受けた。

『桜戸雑話』は、文政一三（一八三〇）年に阪倉信明が著した随筆である。阪倉信明が隠棲した庵名にちなんでこの書名がつけられた。草稿のほうには朱で推敲したあとがあるが、全体の内容は本編とほぼ一致しており、本編の中巻は紛失したものである。『西宮市史』（魚澄惣五郎編、一九六〇年）では草稿三巻をもとに一部の内容が紹介されているが、ここでは、本編について全容を紹介し、草稿については次の機会に譲りたい。

内容は、郷土西宮、歴史、天変地異、文化・芸能、動物奇談、異国文化など多様である。最初に郷土西宮について書かれており、岡太社のあたりは「往古ハ武庫の海原なり。西ハ津の、松原辺よりして北ハ小浜あたり迄一面の入江にて有し」と記され、鳴尾についても、「六百年已前の和歌にハ見へす」、「今、武庫守部などのあたりならんとそ思わる。今は武庫川の土砂年々流れいつる事夥しく、又風波に沖より寄る土砂くハ、り、平地となり・・・」と、鳴尾のあたりは昔海であったが、土砂の堆積により平地になり、西宮の海岸線が、六甲山麓近くにまで及んでいたことが記されている。

歴史については、蒙古襲来の経過を詳細に書いている。天変地異としては、武庫川の氾濫とそれに関して武庫川の治水方法、大陸での治水事業の例について頁をさいており、武庫川の氾濫といかにその氾濫をくいともめるかが、大きな関心事であった。その他、明和八年の早魃の前兆である明和七年の異変、早魃による飢饉のため爆発的におこった明和八年のお

かげまいり、天明二年、三年の飢饉について書かれている。

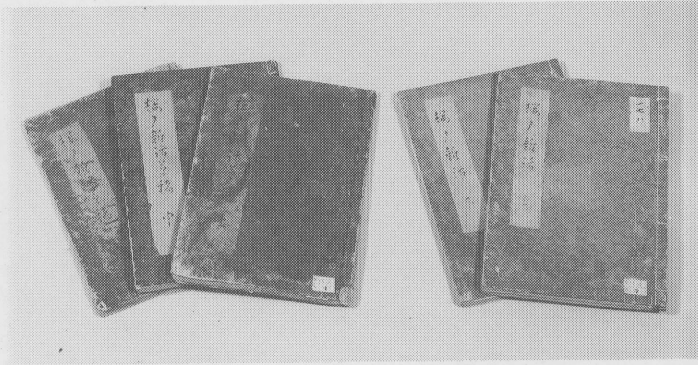
文化・芸能には、茶道、歌舞伎、端午の菖蒲、相撲、色、書院・玄関、仮粧書、日本人の美意識などがある。日本人の美意識では、

「播（橋）春暉か書る物に、蛮国の人はひいとろを以て日輪の火を取り煙草を喫すると言ひ。日本の人は貴賤ともに普く日輪をとくとみ恐れ仰かざる者はなし。又、蛮人云。日本人は珍しからざる月輪をめつる。いかなれハ面白きにやとあやしみけるとそ。いかに風土の違へはとて日輪の影をかしこみ恐れす、又、月花のあはれをもしらざる戎心はいかにせん。されハ、我国の山桜の花のあはれ深き事はたとふべき物あらざれとも、彼蛮国の人に見せなは、此花は珍しき迄の見所なしといはん。又、鳥にてハ時鳥を見せなは無下に、毛付かたち見苦し。声もあや薄く面白からすといはん。吾朝に月花はさらなり、此鳥をめつる事ハ、しめやかに降五月雨の夜深き頃、又ハ、あけほの、空なとほのかに啼一声のあはれ身にしみて覚ゆるなり。古き歌に、

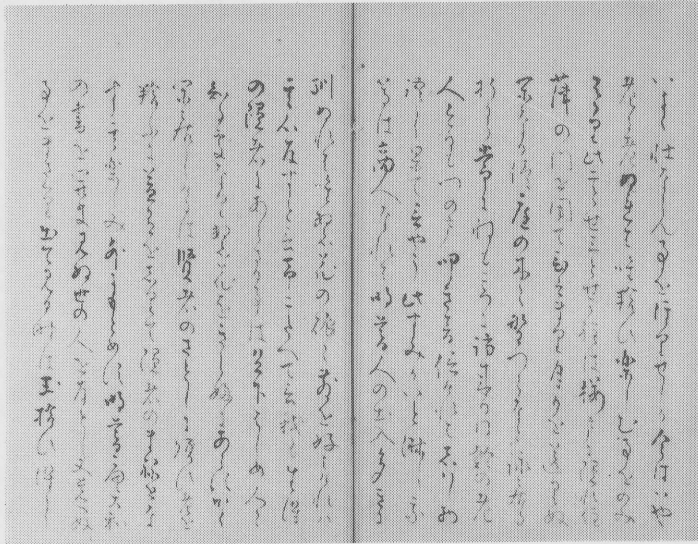
昔思ふ草の庵りの夜るの雨に涙を添る山時鳥

此風情折からのけはひ声を聞かても、涙の落ぬへき心地せられて、風情あはれなりけるを、彼蛮国人ハ兎角に色々とたくみなしたる美器のたくひ、又は、結構を尽せし織物の類、花鳥にてハ、かたちのさまくといふと美しきを悦ぶ国風なれハ、我朝の人の心とは日を同しうして論すへき事にあらす。」と日本人のもののあはれを感じる心と、欧米の美意識の違いを明確にしている。

動物奇談には、大鷲三話、高山の狐、蛇（鶏卵をねらう蛇、娘と蛇と道元）がある。鶏卵をねらう蛇の話は童話的である。



『桜戸雑話』本編（右）と
草稿（左）



本編本文42章

寄贈資料一覧

昭和20年購入のキューピー人形（海藻志ず）、
蚊帳・飯櫃・しんし・紙切り・大福帳など36
点（田中健次）、衣料切符・17年式防空用防
毒面・ゲートル・鉄兜など29点（井上収次）、
日本軍トランク・飯盒（由利喜美子）、箱枕・
しんし・手提籠・川西航空機株式会社封筒・
天秤など17点（正木久恵）、いのこのかざり
（森 武）、スジキリジョレン・スジキリ・

牛糞出し・カマオサメ（小西繁雄）、池揃え
購の講道具（下大市農会）、屏風・銭箱・ふ
ご・箆（増田行善）、明治天皇肖像掛軸・歴
代天皇肖像掛軸・ひさご・携帯用弁当箱・日
本立志編1～9（魚見真人）、軍服一式・砲
弾5点（田中尚友）

ご寄贈ありがとうございました。

（1989年5月～1989年11月、敬称略）

目次

資料館ノート
郷土史講座と体験学習…………… 1
収蔵庫ノート
資料紹介『桜戸雑話』
（池田直子）…………… 3

寄贈資料一覧…………… 4
表紙：塩瀬町生瀬・浄橋寺の軒丸瓦拓影
西宮市立郷土資料館ニュース第6号
発行 1990年1月1日 西宮市立郷土資料館
〒662 西宮市川添町15番26号 TEL0798-33-1298